

「考古学研究室研究紀要」創刊にあたって

このたび、われわれの籍をおく東京大学文学部考古学研究室の研究紀要が創刊される運びとなった。

本考古学研究室は、大正3年(1914)、後に初代主任教授となった原田淑人講師が、文科大学において考古学の講義を開講してから68年、昭和13年(1938)に文学部に考古学講座が設置されてからでもすでに44年の歳月を経ている。この間、原田淑人、駒井和愛両教授はじめ歴代の教官、学生によって数多くの研究成果が、東京大学文学部から出版されてきた。『支那唐代の服飾』(東大文学部紀要第四 1921)、『樂浪』(1930)を始め、『考古圖編』No.1~20(1927~36, 51~64)、さらに『考古学研究』として、『遼陽発見の漢代墳墓』(1950)、『曲阜魯城の遺蹟』(1951)、『樂浪郡治址』(1964)が刊行された。また昭和30年代に入ってから北海道の調査が始まり、その成果が『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上・下』(1963, 64)として実り、さらに『常呂』(1972)、『岐阜第三遺跡』(1977)、『ライトコロ川口遺跡』(1980)等として発表されてきた。さらに千葉県我孫子市の発掘調査も行い、その成果が『我孫子古墳群』(1969)として、本研究室で編集され、我孫子町教育委員会(当時)から刊行された。また、東大構内遺跡の調査が本研究室と理学部人類学教室で行われ、『向ヶ岡貝塚』(1979)として文学部から出版された。このほか、本研究室から『考古学研究ノート』(1979)が刊行されている。

このような数々の研究業績の上に、今回論文集として『考古学研究室研究紀要』第1号が刊行されることになったのである。

およそ紀要の創刊ということは、研究室員全員のそれへの情熱と意欲の高まりがなければ不可能なことである。幸いにも昨年頃より本研究室の若い人達の間、自分達の研究成果を紀要として出版しようという気運が生まれ、ここに教官、大学院生の論文10篇をまとめ刊行することができた。

われわれ一同、このささやかな論文集が、今後いささかでも学界に寄与できればと心から望むと共に、多くの方々の御叱正と御鞭撻をお願いする次第である。

なお最後になったが、本紀要の創刊に当っては、文学部事務長河合良之氏、前会計掛長植田栄司氏、現会計掛長高柳英敏氏、会計掛高橋正敏氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった安齋正人助手、原稿を整理した陶山俊恵氏の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上 野 佳 也